

# 正倉院薬物を取り巻く世界

— 最終回 —

鳥越泰義

日本薬史学会・評議員・元（株）常磐植物化学研究所顧問

## World around the Shosoin Medicines

— Final Paper —

Yasuyoshi Torigoe

The Japanese Society for History of Pharmacy, Councilor  
Tokiwa Phytochemical Co., LTD. former Adviser.

**要旨：**「正倉院薬物を取り巻く世界」については約10年間連載を続けました。この間、中国の高僧・鑑真について、また、唐の皇帝玄宗の生き様にもスポットを当ててみました。

最終回は、楊貴妃にまつわる伝説を求めて中国・西安を訪れました。また、日本に残る楊貴妃伝説も求めて旅しました。

**キーワード：**皇帝玄宗、鑑真、楊貴妃

唐王朝（618～907年）、第6代皇帝玄宗（李隆基）の治世（712～755年）は「開元・天宝の御世」、「盛唐の世」といわれて特筆されています。

その中心都市であった「長安」（西安）は世界最大級、百万人の民衆を抱えて東西南北各地から人々が集まる国際都市として繁栄していました。

その当時のわが国は、奈良時代、東大寺の大仏が完成した頃、特に、聖武天皇、そして娘の孝謙天皇の時代でした。人々は世界トップクラスの先進国家の唐王朝に学ぶために、生命の危険もかえりみず遣唐使船などに乗って海を渡っていった時代でもあったのです。

ところが、唐王朝の玄宗皇帝は、より良い政治と民衆のより一層の幸せを目指して、日夜奮闘していたのですが、50歳ころから政治の世界に身を置くことにすこし疲れが出始めました。

これに追い打ちをかけたのが、皇后同然の待遇と

寵愛を受けていた武恵妃の病死でした。初老性鬱病にかかったともいえる皇帝を救う道を求めて、側近のトップにいた宦官（かんばん）の高力士が知恵をしぼります。その結果は玄宗の息子（寿王瑁）の嫁、寿王妃（楊玉環）に目をつけてしまいました。世間の目をはばかるために道教の尼（女冠）、楊太真に変身して玄宗皇帝の前に現れました。楊太真、（元寿王妃）の知性に裏付けされた若さあふれる輝くばかりの美しさに、男、玄宗は目がくらんでしまいます。時に楊太真22歳、玄宗56歳、（在位28年目）でした。この人生の出会いが後の楊貴妃と玄宗皇帝の激しい恋物語、そして悲恋へと発展していくのです。

正式に宮中の人となるために道教の尼としての楊太真は還俗しなければなりません。

西安の「楊貴妃の墓」の上部にある「太真殿」内の大型絵画がこの情景を示しています。（「写真4」）。後宮入りして後、やがて楊貴妃の誕生となり

ます。皇后の次の地位「貴妃」の座について「楊貴妃」27歳、玄宗皇帝61歳でした。

最終回を迎えた「正倉院薬物を取り巻く世界」をお読み頂く際に、連載の前回（第10回、「臨床福祉ジャーナル」第13巻2016年）と前々回（同誌・第9回、第12巻、2015年）で玄宗皇帝と楊貴妃が歴史に残した残照ともいえるものを中国に旅して記述しました。

特に前回の84ページから85ページ、表1「玄宗皇帝（李隆基）と高僧鑑真、そして楊貴妃」にこの流れをまとめましたので、これらをご参照ください、これからの本文をお読み下さい。

最終回（連載11）の内容の主要構成は次の3点となります。

(1) 平成28年（2016年）5月に再訪した中国西安、洛陽に残る楊貴妃の残照。

(2) 我が国に残る楊貴妃伝説を求めて訪れた山口県長門市への旅。

(3) 中国西安の楊貴妃の墓で求めた一冊の本、剪紙図説「武則天・楊貴妃」（三秦出版社）「臨床福祉ジャーナル」第12巻2015年（平成27年）連載－9－〔写真4〕78ページ〕にある中国の楊貴妃伝説は目を見張るばかりの話題が続きます。

中国伝統の民俗工芸品、剪紙と共に引用させて頂きました。本題にはいります。

### (1) 平成28年（2016年）5月に再訪した中国西安、洛陽への旅。

西安の楊貴妃の墓を再訪した今回は園内の説明をここの学芸員にお願いしました。

そのお陰で極めて収穫の多い見学となりました。

「写真1」から「写真4」にかけて画像とともにそ



【写真1】「楊貴妃の墓」入口（右端上部）と売店（左端ここで、2014年「剪紙図説、武則天・楊貴妃」を購入。



【写真2】楊貴妃像、中央奥の建物、「太真殿」。



【写真3】「楊貴妃の墓」の園内を説明した若い女性学芸員。ここを訪れた日本人が「日本にこれと同じ像を建立したい」と言われたとの説明に驚く。



【写真4】「楊貴妃の墓」の上「太真殿」内の正面にある大型絵画。「楊太真（楊貴妃）」が玄宗皇帝の妹（道士一女冠）の立ち合いのもと「還俗の儀式」を受ける状況。

の説明を御覧下さい。

洛陽では「唐三彩」の窯元を訪ねました。

ここで出会った試作品の「唐三彩・楊貴妃」は「写真5」「写真6」に示しましたが、日本に持ち帰って、私の手元にある試作品、唐三彩・楊貴妃は洛陽の中国人の暖かい心が今でも私のここに生き続けています。

**(2) 山口県長門市向津具半島に残る楊貴妃伝説をもとめて。**

平成29年（2017年）5月に山口県の長門市を訪ねました。宿泊は長門市の西、ひとまる駅の近くの「油谷湾温泉・楊貴館」にしました「写真7」「写真8」「写真9」「写真10」。ここからバスで約30分、「楊貴妃の里」へむかいます。ここには古刹「二尊院」があります。境内には「楊貴妃の墓」、「宝物館」には玄宗皇帝が楊貴妃の成仏を願って日本へ送ったともいわれる「木造阿弥陀如来立像」「釈迦如来立像」（重要文化財）が安置されています。「写真11」「写真12」「写真13」「写真14」「写真15」「写真16」「写真17」。

二尊院の住職、田立智暁氏をお訪ねして、中国西安にある楊貴妃像と同じものを日本に建立したいと申し出た日本人をご存じか？、そして、向津具半島に残る“楊貴妃漂着の地”を訪ねたい、と話しました。素晴らしい展開となりました。

楊貴妃像の日本建立を懇願した日本人と田立住職はごく親しい間柄、楊貴妃漂着の地を案内してから、その方を“長門湯本温泉”で訪ねてみることにしました。

“楊貴妃漂着の地”附近、「写真18」「写真19」「写真20」をご覧下さい。



【写真5】



【写真6】

【写真5】【写真6】洛陽の「唐三彩」の窯元を訪ねる。土間の机の上に置かれた「唐三彩・楊貴妃像」（高さ約30cm）を購入したいと申し出る。「試作品故、値はつけられない」「あげるから日本へ持ち帰りなさい」と言われ驚く。



【写真7】山口県長門市向津具半島（左上）にある「楊貴妃の里」へ



【写真8】楊貴妃漂着の地（唐戸口）



【写真9】油谷湾温泉「楊貴館」。



【写真12】「楊貴妃の里」にある楊貴妃像。中国・西安市「楊貴妃の墓」の楊貴妃像と全く同一の「西安市美術院」で制作されたものを我が国へ。



【写真10】「楊貴館」玄関右手にある楊貴妃像。



【写真13】「楊貴妃の里」の楊貴妃像と二尊院本堂。



【写真11】「楊貴妃の里」にある「二尊院」のパンフレットより引用。



【写真14】二尊院本堂



【写真15】「楊貴妃の里」にある楊貴妃の墓、五輪塔。



【写真16】「楊貴妃の里」二尊院本堂（左端）と木造阿弥陀如来と木像釈迦如来を安置する「宝物館」と住職・田立智暁氏。



【写真17】「宝物館」内に安置された二尊院の本尊（二尊院のパンフレットより引用）。



【写真18】「楊貴妃漂着の地」（唐戸口）—【写真7】、【写真8】参照—へ向う田立智暁住職 この付近はマムシ出没の由。



【写真19】「楊貴妃漂着の地」へ向かう時、廃屋を見る。



【写真20】楊貴妃漂着の地（唐戸口）の海岸を崖の上から望む。

つぎに、二尊院住職の田立智暁氏は私を車に乗せて長門湯本温泉へ向かいました（写真7参照）。長門湯本温泉の旅館、「玉仙閣」の前で車を降りました。

中国西安の楊貴妃像の前で、学芸員から聞いた話「この像が完成した1989年頃（平成元年頃）訪れた日本人」とは、ここ「玉仙閣」の伊藤孝身社長を中心とした人達であったことがわかりました。

西安の楊貴妃像を造った「西安市美術学院」で制作された楊貴妃像は海を渡って日本へ1992年頃（平成4年頃）山口県長門市向津具半島に「楊貴妃の里」が整備される前に安置されました。

「玉仙閣」内は楊貴妃関連の美しい展示品で溢れていましたが、その中で伊藤孝身社長の楊貴妃への想いを象徴するものがありました。

西安の華清池内で発掘された楊貴妃が入浴した風呂“海棠湯”と全く同一サイズの浴槽が館内に「貴妃湯」として再現されて、宿泊客が利用できるのに驚きました。「写真21」「写真22」「写真23」「写真24」。



【写真23】「玉仙閣」玄関内で来客を迎える楊貴妃像。



【写真21】「長門湯本温泉」「玉仙閣」の玄関に立つ、伊藤孝身社長と楊貴妃像。中国・西安「楊貴妃の墓」を訪ね、ここにある楊貴妃像を山口県長門市油谷・向津具半島の「楊貴妃の里」に設置したいと懇願した日本人はこの社長でした。



【写真24】「玉仙閣」内の「貴妃湯」。(中国・西安「華清池」にある楊貴妃が入浴した「海棠湯」を寸分たがわず再現) (臨床福祉ジャーナル2015、連載9、82頁、写真17参照)。

### (3) 中国の民俗工芸品、剪紙による「楊貴妃伝説」。

楊玉環（幼名、後に楊太真、楊貴妃）の一生を中国伝統の赤色の剪紙で表現して追っていきます。とくに「安史の乱」（755～763年）によって都「長安」（西安）を追われて、郷里、蜀（四川省）へ玄宗皇帝と共に逃れる途中、馬嵬（今の楊貴妃の墓のある附近）で死を迎えます。

ここからは我が国では全く目にする事のない楊貴妃伝説が語られます。

その一部を剪紙とともにご紹介します「写真25」～「写真31」。



【写真22】長門湯元温泉「玉仙閣」伊藤孝身社長。



【写真25】中国の民俗工芸品・剪紙による、美女「楊玉環」（後の楊貴妃）（「剪紙図説、武則天・楊貴妃」孔正一編、韓靖著、中国三秦出版より引用）。



【写真26】玄宗皇帝と楊貴妃。（「剪紙図説、武則天・楊貴妃」より引用）



【写真27】{安史の乱}で玄宗皇帝と共に郷里 蜀（四川省）へ逃れる途中、馬嵬（ばかい）、（中国・西安「楊貴妃の墓のある付近」）で、殺害された楊貴妃は奇跡的に息を吹き返して、唐を離れ、長門国向津具（写真7、写真8を参照）に上陸、奈良の都平城京に到着…非常に珍しい「楊貴妃伝説」が展開されてゆきます（「剪紙図説、武則天・楊貴妃」より引用）。



【写真28】平城京に入った楊貴妃は太極殿で孝謙女皇に拝謁、ここには藤原仲麻呂、藤原剛雄、さらには吉備真備も列席した。（「剪紙図説、武則天・楊貴妃」より引用）。



【写真29】「孝謙女皇」と題するこの頁では光明皇太后の病死、孝謙女皇の退位、淳仁天皇、更には看病禅僧道鏡まで記述します。そして、僧籍を持つ孝謙上皇が再び即位して、称徳天皇の出現とまで述べています。（「剪紙図説、武則天・楊貴妃」より引用）。



【写真30】盛唐時代、絶世の美人楊貴妃も年を経て、奈良・平城京での各天皇を始め、親しい友を失いました。終日読経し、木魚、を打って焼香、来世を祈る日が続き、神仏の恵みを得て、後世の人々に無限の遺恨と美しい思いを残したまま日本で逝去したと結んでいます。（「剪紙図説、武則天・楊貴妃」より引用）。



【写真31】日本には楊貴妃にかかわる多くの遺跡と感動的な物語がある。京都駅近くの泉涌寺（せんにゅうじ）の「楊貴妃観音像」、山口県の向津具半島にある二尊院についても詳しく記述されています。（「剪紙図説、武則天・楊貴妃」より引用）。

中国の「剪纸図説、武則天・楊貴妃」で述べられている彼女の一生の最後の記述では、日本に残る楊貴妃伝説と遺跡について、いくつかを紹介しています。その中には、前述した山口県長門市向津具半島の「楊貴妃の里」の紹介、京都駅近くの「泉涌寺」（せんにゅうじ）の「楊貴妃観音」などにも触れています。泉涌寺と楊貴妃観音については「写真32」「写真33」「写真34」「写真35」。をご覧ください。



【写真32】京都、泉涌寺山門（重要文化財）。



【写真35】「楊貴妃観音」（重要文化財）。



【写真33】京都、泉涌寺付近。

さて、これまで楊貴妃にまつわる残照ともいえるものを求めて、中国、そして日本を旅してきましたが、最後は、中国とは全く異なった、我が国ならではの楊貴妃の残照が今もかがやいています「写真36」「写真37」「写真38」。



【写真34】「楊貴妃観音堂」。



【写真36】楊貴妃供養・炎の祭典を告げるポスター（楊貴妃の里）。



【写真37】「炎の祭典」楊貴妃像への供養 田立智暁住職。



【写真38】「炎の祭典」楊貴妃の墓・五輪塔への供養 田立智暁住職、上方の海は油谷湾。

最後に、中国西安「華清池」内の売店で求めた“玄宗皇帝と楊貴妃の愛と死”を白居易（白樂天）の「長恨歌」を基にした「ミュージカル」画集の表紙と楊貴妃の死の場面をご紹介してこの連載を終了いたします「写真39」「写真40」。

受付日：2019年3月25日



【写真39】「長恨歌」（白居易—白樂天一の長編詩）をもとに玄宗と楊貴妃の悲劇をミュージカルにした画集（中国・陝西・華清池旅游有限公司）の表紙より引用。



【写真40】ミュージカル「長恨歌」楊貴妃の死の場面。「長恨歌」（中国・陝西・華清池旅游有限公司）より引用。

